

長沼 光彦 著

## 『中原中也の時代』

疋田雅昭

九十年代後期から精力的に中也論に取り組んでこられた長沼氏のこれまでの論考に加え、多くの書き下し加えられたものである。主たる考察は中也が詩人として出発した一九二四年から、第一詩集「山羊の歌」収録の主たる詩が作成されたと思われる一九三〇年頃までを対象としたものである。

氏がこれまで研究に着手してきた時期は、ちょうど私の研究のそれと重なっており、またその対象が二冊ある中也の詩集のうち「山羊の歌」の方にその関心の中心がある点においても非常に多くの問題意識を共有しており、色々と教わる点も多かった。特に「……の時代」(このタイトルは私の博士論文と偶然同じである)というタイトルが端的に示している様に、言説研究によって中也詩の相対化が期待される点は、個人的に最も魅かれた点であったが、同時にその勝手な「期待の地平」が本書に対する今回の批評に繋がっているとも言える。まずは、著書の全体像を確認しておこう。

第一章は、ダダ詩の検討である。中也の詩的影響は、短歌↓ダダイズム↓象徴詩という理解が通常であるが、意味的にも形式的にも破壊を目指そうとするダダのあり方と、ソネットや韻の意識など均整を目指そうとする象徴詩のあり方が矛盾するため、中也が象徴詩と出逢った後でも、ダダイストを自称し続けていたことは、研究史上よく注目される点である。

氏は、中也のダダ詩の分析を通じて、ダダイズムの不徹底さではなく、むしろ、ダダ的な破壊と均整を目指そうとする志向の両方をはじめから混在するあり方に中也のダダイズムの独自性を見出そうとする。

さらに同時代の「センチメンタリズム」関連の言説にふれ、そこに反することも与することも出来なかつた位置から独自の叙情性を立ち上げる契機を得たと指摘する。そこに当時の恋愛から学んだ叙情性や、認識以前をめぐる問題系を議論の俎上にあげ、ダダ詩以降の中也の詩業に対する意義を見出している。

第二章は、象徴詩との関係についての検討である。象徴詩の存在を最初に中也に教えたのは、富永太郎であつたろうが、その富永からの強い影響を中也がいかに断ち切つていったのか、その軌跡を「夭折した富永」や「或る心の一季節」そして「朝の歌」に見出す。

さらに、富永を「帰納的」と評し、対して自己を「演繹的」とみなす中也の見方を小林秀雄やランボオの影響下に考察し、小林の鑑賞者としての理論に抗する形で、中也が自己の理論を構築して来た過程を明らかにしようとしている。

第三章では、ダダイズムが形成した精神的支柱を象徴というフォルムによって表現してゆくという中也のスタイルが確立されてゆく過程において、最も重要なキーワードとして氏は「生活」という語彙に注目する。

ただし、中也の「生活」という語彙は、同時代言説の「生活」つまりはプロレタリア的なそれとは全く意を異にしている。むしろその異質ぶりこそが、中也の思想の根幹にあるとも言える。そうした同時代的な異質性や、それを中也の残している読書記録の中から検証しようとする過程は、大変興味深く、学んだことも多かった。

終章は晩年の中也の動向について論じている。ここでの「自力」「他力」という語彙も、この時期の中也研究ではよく論じられるキーワードである。それぞれの時期の中也において、触れべきテーマなりキーワードなりが、きっちり押さえられてい

る構成である。

氏の研究スタイルは、よい意味でも悪い意味でもオーソドックスである。ダダイズム、富永、小林、象徴詩、生活と芸術をめぐる諸問題と、中也研究に関心のあるものならば、この目の構成が典型的な中也物語の軌跡であることは、すぐに了解されるだろう。逆に言えば、「中原中也の詩人としての原点」に拘る氏の研究スタイルから考えれば、こうした考察の手順はむしろ必然であつたとも言える。

そして氏のもう一つの特徴は、作品自体の詳細な検討である。中也のダダ詩自体の詳細な分析を通して、その様相を導いてゆくこととする論考には教わる点が多い。従来は、意味不明箇所をダダ的であるなどと述べておけば、事足りるであろうという風潮がなきにしもあらずであつたこの時代の諸作品を意識的に取り上げ、そのダダ的な観念や詩を同時代の「センチメンタリズム」や「生活」という言葉のあり方と対置して考えてゆく手つきなどは、当時の中也詩のあり方を相対化する契機となる可能性をも感じさせるものだと思う。

しかし、こうした分析自体は詳細であつても、中也の詩的モチーフが同時代言説の影響を受ける以前からの生得的なものであり、後の影響はそうした生得的なものを具現化したものにならざるという指摘は、大岡昇平ら先行論者たちと同じ思考形態を共有していたことでもあり、氏が本書では扱うことの無かつた初期短歌などの問題をここに加えても、同時代言説との関係

性は、現在に至るまで、なかなか中也詩という言説群を相対化し得ない。

これは単に氏の方法の不徹底を糾弾しようとしているのではない。そもそも言説研究がある特定の言説を特権化せずに、むしろその相対化をもくろんでいるという認識が私の一方的な理解に過ぎないかもしれないからだ。(そもそも氏は、自書に関して「言説研究」であると述べているわけでもない。)

既に歴史化された観のあるニュークリティックの詩観の一つに、文学的表現は「パラドックス」を含むものであることが指摘されている。中也の詩に矛盾する要素の存在を指摘し、それを固定化した概念への抵抗とみる氏の中也観も、中也詩に内在するパラドックスを肯定的に評価しようとするものであり、それは中也詩の称揚の仕方といわば「王道」である。

しかし、こうしたパラドックスが中也詩に内在しそれは評価すべきものであるということ、もしくは、そうしたパラドックスを生み出す詩法が、どの様な言説群にも先立って中也に生得的なものであったという論証パターン、このどちらかを崩さないと、私を含め、言説研究による中也詩の相対化は困難であるというのが、現在の私の率直な感想である。

本書において、こうした思いを強くさせられたのが、「読書」及び「芸術論覚え書」についての二つの論考である。

氏も指摘しているように、中也は一九二七年に突然読書を始めたわけではない。しかしながら、己の読書体験を系統立てて

記録しようとする行為そのものは、研究の俎上にのぼらせるべきであるという指摘は正鵠を得ていると思われる。

論中における「近代文学十講」における科学や物質至上主義に対する「生」の重視、中原の富永評における「演繹」「帰納」という語の使用法など、中也の詩論に通底した思考や用語が、同時期の読書記録の内容から指摘しようといった点は、非常に興味深いものであった。

しかしながら、論が後半に進むにつれて、徐々にいわゆる定番の中也史に則した物語に安易にはまってゆくくらいが感じられる。特に「山羊の歌」の構成意識を論じる箇所では、従来の解釈の域を出ていないのではないだろうか。この後に続く「生活」を論じ「在りし日の歌」へと接続してゆく部分は、そうした論証パターンに従来から付随している「物語」に魅力があるため、中也の伝記解釈の説としては面白いと感じたが、これまでの中也論が、こうした魅力的な「物語」に牽引される形で形成されて来たことも事実である。そこでやはり、読書や「生活」に関する言説群の調査が、中也詩を時代的に相対化する様相が見たかったと思うのは、私の個人的な期待値に過ぎないのだろうか……。

後者は、中也の詩論の体系を論じてきた本書において、終章の後に「付」として付け加えられている章である。氏の詩論分析には、頷かされる点も多く、特に「象徴とフォルム」の章で論じられた「暗示」と当時の象徴理解の水準との関係、そこか

ら導かれる象徴と意味が循環するという中也の詩観の指摘は、多くの中也詩の解釈に敷衍出来る重要な指摘だろうと思う。一方で、私の論に対して、「生と歌」と「芸術論覚え書」の間に断絶線を引き、その問題意識が異なることを主張している。つまり、前者にあった主客一致(不一致)の問題系とは異なる議論が、後者では展開されているというのであるが、こちらには私にも異論がある。

私が中也の詩論に一貫して主客一致(不一致)の問題を指摘し、その連続性を指摘しているのは、その主張が同時代的言説(特に現象学をめぐるそれ)と様々な形で接続されてしまうことを重視しているからであり、そこに中也の独自性を認める以上に、同時代的な言説空間の付置に相対化したいと考えているからである。

また一見飛躍の多い中也の詩論の理論展開は、現代の言語学的な論理の範疇で一定の理解が可能なこと、さらには、中也の詩論には自説の正当化の手段として常に芸術家と対比する概念(例えば「生活者」)などが用いられることなども、「芸術論覚え書」以前から指摘しようる中也の詩論の特徴であることは拙書でも再三指摘している。だからこそ、ある詩論を特権的な箇所として論じることが中也の詩法のビルディングストーリーを形成してしまい、結果的に中也詩(または詩論)のいわゆる「神話化」を補強してしまう、といった最早それ自体がクリシユと化したつつある批判を想起してしまう。

むしろ、氏が本書で提唱する各時期の詩論、詩篇、日記等の言説を微分化してゆく作業は、中也の思考原理を抽出しそれを言説空間に置き放ち相対化したいという私の個人的欲望とは、そもそも逆のベクトルを有している可能性は否定できない。最後に本書と関係する事項を記載した年譜が付いていることも、それをはつきりと示しているのかもしれない。しかし、もしそうであるのなら、中也の言説に「時代」が召喚される理由は何なのか……気になるところである。

もう一つ氏の手法で気になったのが、ここまで中也の詩的営為を時系列に問題化し、その意識の変遷を探ろうとしながら、それらが「山羊の歌」という詩集に収斂してゆく過程における問題、例えばバリアント検証とか、編集意識の問題などを論の俎上に置かなかつたという点である。これらの問題がこれまで述べてきた氏の方法意識と直結すべき問題であることは言うまでもない。むしろ、氏の中也論は今後も継続してゆくわけで本書はその出発点に過ぎない。これらについては、今後の論考が楽しみに待たれるところである。

最後に、そそっかしい私は誤植に関して人の事を到底言える立場では無いが、数カ所引用されている私の名前が全て間違っている。そのことを中也風に「なにゆゑに」こ、はかくは羞ぢらふ」と自戒を込めながら、指摘させて頂こうと思う。